

英語デジタル教材作成 ・活用ガイド

PowerPointとKeynoteを使って
唐澤 博・米田謙三 著

A5判・192頁
本体1,800円＋税

[評者]
大西久雄



授業で安心して ICT 活用ができる ガイド誕生！

高校英語科教員かつ ICT 活用というキーワードで、東西の白眉と言える2人のオーソリティが書き下ろした本書は頼もしい。英語、ICT 共に関心の高い向きにとって待望の書であろう。小学校や中学校の英語に関わる教員にとっても、押さえるべき点、知っておくとよい点等々、校種こそ違いますがすぐ授業で活用できる事例が随所に散りばめられており、大変行き届いた内容となっている。ICT 環境整備、その活用授業の考え方、教材づくりの基礎と応用、活用で直面する課題への向き合い方、活用事例の6つの章と資料集からなる。中でも第4章の教材集にあるフラッシュカードの作成は大いに役立つ具体例である。当例に限らず教材作成の解説が、画像の背景削除、PDF ファイルの分割、パワーポイントの暗転、明転等が、実際に授業で ICT 活用をしようと考えている者にとって、知っておくと便利で嬉しい“ちょいテク”なのである。実践者だからこそ気づく優しい視点だ。

また、本書は単なるスキルのハウツーものに留まっていない点が良い。デジタルやネットを活用する上で押さえるなければならない配

慮事項に目が届いており、抜かりない。例えば、とかく学校教育現場では疎くなりがちな著作権に関する知識と情報、それを踏まえた情報モラル教育の年間指導計画例などは、教員にとってありがたいページである。そして、ICT 活用能力を高めるためには教員の研修が大事であることは言うまでもないが、教員のみならず管理職を対象とした研修に視座が置かれていることも注目すべき点だ。ICT を学校で効果的に活用するためには、管理職の意識の向き方が重要であり、必要な指摘であろう。さらに、研修会で実際に使用するワークシートが添付されているのも具体的、かつ実践的で役立つ。

デジタル教材を英語授業に活用するために書かれた本書ではあるが、私が一番に感心させられた点は、とかく使い方の説明しっぱなしの書籍が多い中、何のために活用するのかの本質がしっかり示されている内容になっているところである。現在の ICT の潮流を紹介しつつ、プレゼン力や反転授業などに触れながら、ICT を活用してどんな子供たちを育成すべきなのかが明確に打ち出されている。そして、子供が得た力を、実際の学校生活や社会の中で、どのように活用していくことが大事なのかをプロジェクト学習の例を示しながら、提案しているのは素晴らしいことであり、本物である。これからの情報化社会に対応した ICT 活用授業のガイドとして、本書は間違いのないお薦めの一冊である。

(おおにし ひさお・
越谷市教育センター所長)

英語教師のための文法 指導デザイン

田中武夫・田中知聡 著

A5判・264頁
本体2,200円＋税

[評者]
溝畑保之



コミュニケーションのための文法 指導を目指す教師の必読書

あなたはどのタイプの先生？
Aタイプ：従来からある文法項目を、日本語で説明し、確認のための穴埋め、並べ替えドリルを行う授業方法しか知らない。Bタイプ：最新の「タスクを使った指導」に挑戦してみようとするが、活動が盛り沢山過ぎて消化しきれない。

Aタイプの場合は、文法をコミュニケーションを支える基盤と位置づけ、その考えを教材研究に活かし、どう指導のステップを工夫すればよいかを学べる。本書では次の4つのプロセスが丁寧である。(1)指導実態についてのチェックリストで現状を振り返る。(2)留意すべきポイントについての解説が行われる。効果的な図表とイラストが使われているので、わかりやすい。(3)工夫の乏しい指導と優れた指導が具体的に示されていて、比較しながら、望ましい指導の理解が深められる。さらに、(4)発展的な指導を生み出せるようなヒントや情報が豊富にある。

「タスクを使った指導」等に着手しているBタイプの先生には、英語教育コラムが役立つ。第二言語習得理論の知見である「暗示的・明示的知識」、「フォーカス・

オン・フォーム」,「グラマーリング」,「アフォーダンス」,「帰納的・演繹的指導」,「アイテム学習・システム学習」,「転移適切性処理」がよく整理されている。これらをEFL環境での授業にどう包括的に具現化するかを考えるとよい。その際,本書の「授業展開をシンプルにする」ための指針と「コミュニケーション体験と文法指導のサイクル」を応用すると,無理なく理論を利用できる。

評価については,筆記テストでもコミュニケーションにする工夫が紹介されている。さらに,実施が困難視されるパフォーマンステストを行うための工夫が評価方法と合わせて紹介されている。指導と評価の一体化を目指せる。

また,Q&A BOXでは,文法指導で避けて通れない,「文法も英語で」,「文法用語の扱い」,「誤りの修正」などについての質問に明快な解答を用意している。

著者達が主張しているのは,「学習の時点の状況が,将来実際に使う状況と一致していればいるほど,その学習内容がうまく使える」に集約されよう。明日教える文法事項にも,この方針に則る工夫が導き出せるような構成となっている。「一人一人の先生が,自分の生徒に合った文法指導ができるように成長できる」ことを願いながら,2名の著者が協力し,書き上げていることがよくわかる。

単なる記号として文法規則を教えるのであれば,生徒の目は輝かない。穴埋めや整序問題での指導を超えた「コミュニケーションのための文法指導」を目指す教員にとって本書は必読の書である。

(みぞはた やすゆき・
大阪府立鳳高等学校教諭)

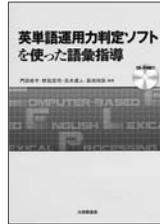
英単語運用力判定ソフトを使った語彙指導

CD-ROM付

門田修平・野呂忠司・氏木直人・
長谷尚弥 編著

A5判・186頁・
CD-ROM 1枚
本体2,100円+税
[評者]

阿部 一



研究成果に基づく語彙学習・語彙指導の提案

語彙学習といえばそこにはシステムティックなやり方ではなく「ただ単語をひたすらに覚えていくしかない」という考えが,長いこと現場の学習者や教師だけでなく,外国語教育の専門家の間でも根強かった。したがって,その研究分野自体がどうしても地味で停滞気味であった。しかし,特に1980年代以降,関連分野を含めた科学的な語彙研究が進むにつれて,語彙領域自体にもかなりシステムティックな構造があることがわかってきており,最近では新しい認知的な視点からの研究やその成果を生かした教材化や指導などの試みが数多くなされてきている。また,その研究や語彙分析には言語学だけでなく,心理学(特に認知心理学)やコンピュータ科学(特にコーパス処理)なども多大な貢献をしている。

本書はそうのように活発に研究されるようになってきた語彙や語彙知識を新たに理論面から見直すことと,その枠組みでの新たな語彙学習や語彙指導を現場に提案するべくタイミングよくまとめられた好著である。これまでも早い段階から心理学的なアプローチで独自の成果を多数発表されている著者

とその研究グループによる,研究成果に基づいて学習・教育現場への本格的な応用を目指したものである。特に語彙学習や語彙指導という難しい分野に,語彙知識を「知っている語彙力」と「使える語彙力」とに分け,あいまいな形でただひたすら覚えて数を増やしていこうという従来の方策に警鐘を鳴らし,大事なことは「知っている」語彙力を実際に「使える」語彙力に転化することだと指摘,そのための学習法及び指導法への道筋を数多くの実証データに基づいて提示している。

その上で研究成果に基づいたこれまでの単なる「知っているだけの知識」とは異なる,「使える語彙の運用能力」を測定するテスト(略称 CELP)を学習者及び教師に付属 CD-ROM として提供もしている。もちろん,これまでも語彙研究やその関連分野で語彙関係のテストやテストプログラムも発表されたり,現場に導入されているケースもあるが,著者たちはこれまでの語彙知識の「深さ」や「広さ」を測るものとは違って,今回,提唱のモデルでは語彙運用がどれだけ「自動化」されているか,また,その「スムーズさ,滑らかさ」はどうかを測定できる点に特徴があるとしている。今後,わが国でもさらに語彙研究に加えて語彙学習や語彙指導の「質的な」効率性や重要性がより高まっていくことは間違いないので,その意味からも“語彙と語彙習得の理論と実践”の流れに重要な一石を投じた本書の登場は実にタイムリーかつ大いに意義のあることだと言えよう。

(あべ はじめ・英語総合研究所所長)